

2016 年 Elective Clerkship 報告書

Harvard Medical School

M3 Female

2016 年 2 月 1 日から 2 月 28 日の 4 週間、Harvard Medical School (HMS) の Exchange Clerkship Program で、Massachusetts General Hospital の Women's Health にて、2016 年 2 月 29 日から 3 月 27 日の 4 週間、Massachusetts General Hospital の Urology にて、実習させていただきました。

① 実習開始まで

10 月中に online で希望プログラムを登録しました。私は産婦人科と乳腺外科に興味があったのですが、産婦人科系で international student の受け入れのあるプログラムは、Women's Health Elective と Gynecologic Oncology and Pathology、妊娠麻酔だけでした。そのため、第 1 希望 Women's Health Elective、第 2 希望 Gynecologic Oncology and Pathology、第 3 希望以下は外科系プログラムを登録しました。

11 月中に必要な書類を Harvard Medical School に送付し、12 月 22 日に、2 月の実習が Women's Health Elective に決まったとメールが来ました。米国 VISA がないと過去に入国拒否された例があり、特に今回は 2 か月と長期なので、VISA を取った方が安心だと、国際交流室の丸山先生からアドバイスいただいております、B1 を取得しました。

今後ハーバードに参加される方は、VISA 申請に必要な書類が 1 か月前にしか届かず、VISA 取得のスケジュールが厳しいので、ハーバードの前に海外に行く予定を立てない方がよいと思います。今回の反省点でした。

② Women's Health Elective

Harvard Medical School のプログラム・カタログの中で、産婦人科の中に位置しており、婦人科プライマリ・ケアを入り口として、避妊・一般婦人科外来・内分泌疾患・摂食障害・閉経期・乳がんスクリーニング・妊娠などを扱う。と記載されていたので、産婦人科のプログラムだと思い込み、産婦人科の First aid や Pocket guide を読み準備していたのですが、実際は内科の Primary Care 部門の中のプログラムでした。

2 月に Women's Health を回っていた学生は私一人で、初めの 1 週間は担当教官である attending の Dr. Roth の外来と、MGH の内科合同カンファレンスに参加して過ごしました。2 週目以降は、私の興味に合わせて、一般婦人科、婦人科腫瘍、Colposcopy、乳腺外科

外来を中心にして、その他、内分泌、骨粗しょう症、Women's Heart、Weight Center などの多様な外来にも参加できるように、予定を組んでいただきました。大体毎日、8:00-17:00 程度の実習でした。

Women's Health や婦人科外来では、患者さんの最初の間診・軽い身体診察、先生への報告、先生の指導下での、Specula (クスコ) 診、Pap smear、HPV test、細菌培養の検体採取、内診、乳房触診、カルテ記載などをさせていただきました。medical assistant の人が、患者さんをまず診察室に通し、体重、血圧、脈拍等測った後に、医学生が部屋に一人で入って行って、自己紹介し、患者さんの了解を取ったうえで間診します。出会った患者さん全員が、医学生が初めに間診することに理解があり非常に協力的で、身体診察も一般的なものであれば全く問題なくさせてもらえました。10-15 分程度の診察後、患者さんの前、あるいは診察室の外で、先生に手短かに現病歴等を報告します。英語で間診を行い、的確に現病歴を報告するだけでも、初めは大変でしたが、アメリカでは医学生は鑑別診断及び今後のプランも提案することが当然のものとして求められており、間違ってもいいから自分で考えることが大切と、日々教えて頂きました。

毎日、外来で出会った症例や疑問に思ったことについて、Up to date で調べて勉強するように言われ、1 日に 1-3 本の up to date を読み、次の日に勉強した内容について先生と話し合う機会をいただきました。Vaginal bleeding の鑑別診断や、乳がんリスク算定モデルなど、それまで知らなかった事を勉強する機会も多く、また一つ一つのトピックについて先生の意見を聞くことが出来、とても勉強になりました。Von Willebrand disease や Sturge-Weber-Dimitri syndrome の患者さんを診察する機会もあり、アメリカという多様な人種の住む国で、非常に専門性の高い病院で実習できる面白さを感じました。

1 か月の実習を通して、一つのテーマを決めて論文などを読んで調べ、最後にワードで資料を作り、先生方にプレゼンする、という機会も与えて頂きました。昨年末に新しい Study が出た Ovarian Cancer Screening がよいのではないかと勧めていただき、論文 3 本、Up to date 3 つを読んでまとめました。Ovarian Cancer Screening に関しては US、UK、日本の 3 つの大規模 study があります。US study に基づいて CA125 による screening には致死率改善効果がないとされていた現状に、昨年末、screening は効果があるという UK study の結果が発表され、ガイドラインを見直すかの議論がされているところでした。Up to date の執筆者の先生である Dr. Carlson が MGH の Women's Health の associate professor でいらしたことから、私のまとめた chart をもとに discussion させて頂くことが出来、とても貴重な体験でした。「I am very impressed with your profound understanding and discussion at very high level.」と言っていただき、その後の実習の励みになりました。

③ Women's Health Elective での実習を終えて

実習の開始直後には、「血液検査の結果を電話で患者さんに伝えておいて。」と言われてただけで、医学生がそのような責任のある仕事を任されるのか、といちいち驚いていましたが、一か月の実習が終わるころには、一人で患者さんの診察を任せてもらえる事が面白く、想定外の内科での実習でしたが、非常に充実したものとなりました。

将来、おそらく研究でだが、アメリカにまた来たいと相談したところ、通常は **visiting student** には **recommendation letter** は出さないが、一か月とても楽しく一緒に働けたので、特別に **letter** を出すと言っていただきました。英語環境かつ、想定していなかった内科での実習で、うまく成果を出せず苦戦する日々でしたが、頑張っている姿を認めていただけて、嬉しかったです。



Dr. Carlson と Women's Health にて



Women's Health の入っている Yawkey Center

④ Urology 実習開始まで

2月の実習に向けて渡米予定の1/30の早朝に、Urologyに決定したとメールが来ました。M2の系統講義の時に、泌尿器科は膀胱癌や腎臓癌、子宮脱等で、女性の患者さんが受診される機会も多い一方で、女性医師が少なく需要がある。と聞いていたので、この機会に泌尿生殖器疾患全体を学習してみたいと、楽しみにしていました。

実習開始2週間前に、Head of UrologyのDr. Bluteの秘書の方からメールをいただきました。実習に参加する学生は4人であり、添付のガイドブックに目を通してスケジュール

を確認しておくように。という内容でした。毎朝遅くて 6:00 開始のチーム・ラウンド前に、医学生はプレラウンドをしておくように、と記載がありました。また、Women's Health の Dr. Roth からも、外科系は実習時間も長いし、志望学生も competitive で手術の奪い合いになる、と聞いていたので、覚悟を決めて実習に臨みました。ガイドブックに、一通りの泌尿器科の知識がまとめられていたので、目を通しておきました。

ちなみに、2 月は Vanderbilt Hall の寮に滞在しましたが、MGH までシャトルバスで 1 時間近くかかることもあり、またバスも 6:00 からしかないので、3 月は MGH のすぐそばにアパートメントを借りました。

⑤ Clinical Urology

参加予定の 4 人の international student のうち 2 人が、家庭の事情でキャンセルしたため、バングラディッシュからきた医学生と私の 2 人で実習が始まりました。初日は 8:00 集合の後、MGH システムのアカウント設定や、ID 取得手続き、院内トレーニング、手術参加のための Scrub training を受けました。

毎日、朝 6:00 に Urology resident の call room に集合し、チームで病棟回診、その後、希望する attending の手術に一日参加し、夕方 17:00 以降にチームで再度病棟回診し、19:00 頃に解散。というスケジュールでした。通常は 4 人の医学生で毎日順番に、希望 attending と手術を選んでいくので、取り合いになるようなのですが、今期は幸い 2 人しかいなかったもので、教育熱心な attending の先生の手術に何度も入ることが出来、とても恵まれていました。

泌尿器科の主な手術としては、Total/Partial Nephrectomy (Open Surgery / Laparoscopy)、Radical Retropubic Prostatectomy (Open Surgery / Laparoscopy / Robot Assisted Surgery)、Cystoscopy、TURBT、TURP、PVP (Photo selective Vaporization of the Prostate)、Lithotripsy、Circumcision、Penile Implant などがあります。実習中に一通り全ての手術を見学することが出来ました。また、手術と教育で評判のよい attending の先生が 2 人いらして、それぞれ腹腔鏡手術と開腹手術をメインでなさっていたので、第二助手で入れていただき、皮膚縫合等させていただきました。

腹腔鏡手術でマサチューセッツ州で有名な泌尿器科医でいらっしゃる Dr. Dahl には、手術に何度も参加させて頂いた他に、外来でも 2 日ご指導いただきました。Dr. Dahl は腹腔鏡下の前立腺全摘術及び腎切除術で有名でいらして、遠くからも患者さんが見えていて、Von Hippel-Lindau の患者さん 3 名の診察にも参加できました。50 代くらいの患者さん達で、片側の腎全摘術後に、残った腎にも腫瘍が多発し、その都度 Dr. Dahl が、透析になら

ないように部分切除術を行っているという事でした。

Urology を実習してみて、一番印象的だったのは、充実した教育システムです。基本的に大事なところでは **Attending** が執刀するものの、それほど難しくない部分では、**Attending** は第一助手となり指導し、**resident** が執刀していました。また、手術の最後の皮膚縫合や、手術前の **Foley catheter** 挿入時には、**resident** が **medical student** に丁寧に指導してくださいました。1-2年目の **resident** は **TURBT**、3年目は **open surgery**、4年目は **laparoscopy** と、任されることには違いがあっても、**resident** が主体となって手技を行い、それを十分に **attending** が指導するという教育システムが浸透していることで、**resident** も忙しい中でも新しいことを学び、任される楽しみを感じ、皆生き生きと働いていました。

手術・外来・病棟業務の他にも、週に一度、**fellow** の先生が **teaching session** をしてくださいました。30-60分程の講義の後に小テストがあり、英語がハンディな分、集中して頭を使わないと、何も答えられずに悔しい思いをするので、必死で勉強して頑張りました。君たちは優秀だね。と言われたので、根性で乗り切れてよかったです。

⑥ 実習の最後に

泌尿器科では、将来アメリカで **Urology** の **residency** をしたい希望者は、最後の週に **Head of Urology** の **Dr. Blute** との面接を申し込む。という事になっていました。私は、実習開始前は、アメリカで **residency** をする予定もなく、**Urology** の実習も日本でしておらず、よくわかっていなかったのですが、4週間の実習の間に15件以上の手術に手洗い参加させていただき、技術のある先生方の指導を受けながら手術を見る喜びや、同じ手術でも症例ごとに異なる腫瘍に対応する難しさ、面白さを感じ、また、**Urology** の先生方の陽気なジョークがとても居心地よく、興味が湧いてきていたこともあり、面接していただきました。

履歴書を提出しての面接だったので、自分のたどってきた道筋や、将来のプラン、**Urology** 実習での **high light** などを話し合った後、「Please let me know when you decide your future plan, and I will give you a letter.」と仰っていただきました。

MGH で実習を始める前は、**recommendation letter** をもらうことは全く考えていなかったのですが、実習をしていく上で、「アメリカでの **residency** は考えていない」と伝えることで、社会見学に来たのかと思われ、指導の熱心さが変わることも体験したため、途中からは、可能な限りやる気を示しながら実習するようにしました。アメリカでは、やりたいと伝えることは良い印象でしかなく、「英語もあまり出来ないのに、知識も技術もあまり無いのに。」などと思われる心配をしなくてよかったです。一度慣れてからは、とても過ごしやすいかったです。

MGH に実習に来る学生は、特に international student は、次年度の residency への応募に向けて、1 か月の間に自分の実力を最大限アピールして、recommendation letter をもらおうと頑張っているという印象を受けました。

⑦ ハーバードでの実習を終えて

TOEFL で 100 点を越え、英語のテレビが理解できるようになり、テキストも読み、自分なりに準備していったつもりでしたが、外来での患者さんとの会話はわかって、毎回 3 時間ほど続く手術中のマスク越しの会話は難しく、政治・家庭・MGH トークも多く、苦労しました。また、英語がハンディになることは予想していましたが、アメリカの医学生に求められている実習内容のうち日本で身に付けてきていなかったものもあり、その点でも十分なパフォーマンスが出来ないことが、非常にもどかしい時期もありました。

しかし、Urology の先生方、MGH・Brigham や Tufts で attending や resident、研究をなさっている先生方、鉄門の先輩方、手術室で出会った日本人の麻酔科の attending の先生、日本から応援して下さった先生方、一緒に実習したバングラディッシュの Mamun、同じ時期にハーバードで実習していた医学生の方々など、沢山の方々に励ましていただき、勇気をいただき、本当に面白く、やりがいのある 2 か月を過ごすことが出来ました。

ボストン滞在中に、鉄門の先輩である、MGH 麻酔科教授の市瀬史先生の研究室にお邪魔させていただきました。アメリカでは、私のように回り道をして年齢が上で、子育て中の女医さんは全くめずらしくない。やりたいことを前向きに頑張っていけばいい。と、お言葉をいただきました。思えば、ハーバードで実習してみたいという単純な思いで志し始めた、今回の海外病院実習でしたが、MGH というアメリカ医療の中心で、前を向いて明るく力強く頑張っていらっしゃる沢山の先生方にお会いする機会を得、貴重なお話を伺う機会もいただき、自分の今後の人生に、大きな力をいただくことが出来ました。

今回の実習の機会を与えて頂きました、東大の先生方、国際交流室の皆様、また、大坪修・鉄門フェローシップからも多大なご援助をいただき、本当に感謝しております。どうもありがとうございました。



Dr. Dahl と外来にて



Attending の Monica と Call Room にて